蕭乾夫人で、著名な翻訳家、文潔若について

蔭　山　達　弥

はじめに

文潔若は1927年7月北京に生れた。清華大学を卒業。人民文学出版社の編集者、最高責任編集者、日本文学研究会理事などを歴任した。1950年代から、文潔若は幸田露伴、泉鏡花、井上靖、芥川龍之介、水上勉、谷崎潤一郎、松本清張、夏目漱石、川端康成、三島由紀夫、有吉佐和子など日本を代表する作家の作品を翻訳。翻訳された文字数は八百万字を超え、中国で日本文学を最も多く翻訳した人と称賛されている。さらに文潔若は、夫君蕭乾と共同で1990年8月から1994年7月まで四年の歳月を費やして、James Joyceの『ユリシーズ』を翻訳した。彼女の長年の功績を称えて、2000年には日本国外務大臣表彰、2002年には日本国勲四等瑞宝章、そして2012年には中国翻訳家協会から“翻译文化终身成就奖”の名誉ある称号を授けられている。

2015年7月、首都図書館において、「文潔若と日本文学」という表題で講座を行なう前日、当時88歳の文潔若は「百歳まで生きられる、百歳まで働くことができると思う。」と、取材記者に対して述べている[1)]。

文潔若の命ある限り、翻訳のピリオドはない。知人の呉江濤から翻訳の苦労について問われた際、文潔若はこう答えている。「多くの人は翻訳が大変骨が折れるものだと思っていますが、私には楽しくて飽きることがありません。私の生活に対する欲求はわりと簡単で、他に興味がなく、ただ一

つ好きなのが翻訳と執筆なのです。私は翻訳するために生れてきたと思っており、それはまた私の人生で一番目を掛けている事業なのです。」[2)]

文潔若を翻訳家の道に歩ませたのは、何よりも駐日本大使館三等秘書官だった父・文宗淑の存在が大きい。文潔若は七歳の時、兄弟と一緒に母に連れられて父が待つ東京に行き、麻布小学校に転入した。1936年2月に二・二六事件が起こり、家族全員が北京に引き揚げたが、東京で「雪子」と呼ばれた二年間、父は日本語を練習するために幼稚園の保育士や家庭教師を雇ってくれた。北京に戻り失業中の身でも、父は家財を売って文潔若を東単にある日本の小学校に通学させ、日本から持ち帰った『世界小学読本』全10巻を文潔若に翻訳するように言い、四年もの間、父は毎晩一つの灯りを共用しながら、彼女が翻訳するのに付き合ってくれたのである。

大学を卒業後、出版社の編集者時代、1950年代の終わりから文化大革命前夜まで、文潔若は仕事の関係で、戦時中「対日協力」をしたという嫌疑で戦後「漢奸」裁判にかけられた学者、周作人や銭稲孫と頻繁に連絡を取り合った。文潔若には特別な任務、余人を以て代えがたい日本の古典文学作品の翻訳を周作人や銭稲孫に依頼する仕事を担当していた。特に銭稲孫とは忘れがたい師弟関係のつきあいがあった。そして出版社で巡りあい、結婚した夫、蕭乾は彼女にとって、常に翻訳の教えを請う指導者だった。

著名な記者・作家の李輝は「現在の翻訳に存在する最大の問題は文学を語っているのではなく、市場ばかりを意識している。学生の国語、文学面での指導不足が、現在の外国文学作品翻訳の急激なレベルダウンを招いている。人々はまさに中国の文学翻訳界で人材が後に続かない現象に直面して焦りを感じているのである。」と、述べている[3)]。

文学の翻訳に求められるのは、ただ単に外国語に熟練しているだけでなく、訳者の母国語の素養、気質、文学の能力に、より高いものが求められるのである。文潔若が翻訳家として今日まで歩んできた道を知ることは、翻訳者が進むべき道を知ることでもある。文潔若が実父、周作人や銭稲孫、

夫君蕭乾から翻訳の技術について学び取ったものは何なのか、そして文潔若自身が考える“良い翻訳”とは何なのか、彼女の回想録、活字化された彼女自身の言葉から読み取ろうとするのが、本稿の目的である。

父は翻訳にこだわる種を愛娘に蒔いた

家柄から言えば、文潔若は正真正銘の読書人の家柄出身と言える。文潔若の祖父は広西、山西などの県令をしたことがあり、家にはまだ祖父が皇帝に朝見した時に着た役人の服や祖母の戒めの文章が残っていたが、その後売り払われた。文潔若の父・文宗淑は同じ世代の兄弟のなかで一番の出世頭だ。23歳で高等文官に合格し、1916年に日本に行き神戸で総領事になった。その後、駐日大使館で三等秘書官に任じられた。1936年、文宗淑は職を解かれ、北京に戻った。一家が北京に帰ってからは、生活は困窮し、文宗淑は家財を売って子供たちの教育費に充てた。1946年、文宗淑は故郷貴州に戻り、生活が貧しく打ちひしがれ、憂うつなまま生涯を終えた。

文潔若が家族を語るとき、最も多いのはやはり父親である。文潔若は《文学姻縁》のなかで、「七歳から、父は私に飽きることなく読書の習慣をつけさせた。当時私たちが住んでいたあの四合院には、祖父、父、姉の三代が買った数部屋の本があり、私たちは図書館に行かなくても、本の海の中をそぞろ歩くことができた。」[4] と、言っている。文潔若の父は勤勉で、自らを律し、古典文学や歴史書を好んだ。古文の基礎は良く、暇な時は詩を吟ずるのを好み、子供の教育にはとても厳しかった。父自身もちょっとしたものが書け、例えば新聞の時局分析を読んで生じた日中戦争についての深い考えは、今は亡き夫蕭乾に発見され、その厚い愛国心は彼に感服されもしたが、残念なことに保存されなかった。文潔若の父にとって最も悔やまれるのは本を出せなかったことである。だから、文潔若は翻訳に従事したのも、父親が果たせなかった願望を完成させるためなのである[5]。

文潔若は「本の虫の学問を探求する生涯」という見出しをつけて、教育

熱心な父について次のように述べている。

> 私は翻訳について小さいときからある種のこだわりがある。日本にいる時、書店に一揃いの日本語訳『ユリシーズ』があった。著者はアイルランド人 James Joyce で、1922 年に出版され、一度は発禁になった。ジョイスは西洋文学の反逆者である。この本は意識の流れという方法を用いて大量の心理の動きを書いている。全編を通してフランス、ドイツ、イタリア、スペイン及び北欧の多種類の言語が挿入されているほかに、時にはギリシャ語やサンスクリット語が使用されている。作者は創作の際、あの手この手と企んで読書のために様々な障害を設けた。文字はめったに見ないものだし、内容は難解で分かりにくい。父は私に言った。「ほら、日本人はあんなに分かりにくい本を翻訳したのだよ。お前が熱心に勉強して翻訳し、将来自分の名前が本に印刷されたらどんなに素晴らしいことか。」[6)]

失業中の父は、家財を売って、学費に換えてくれた。そのころの思い出について、文潔若は「聖心学校で勉強している時、私が履いていたのは四番目の姉のエッジを取った古いスケート靴、清華大学に通っている時は父のお古の革靴を履いていた。」[7)] と、書いている。ともあれ、父によって翻訳へのこだわりは、文潔若の幼い心にしっかり根を下ろしたのである。

翻訳が縁で結ばれた夫・蕭乾との出会い

1950 年、文潔若は清華大学を卒業すると、試験を受けて三聯書店に入社し校正係になった。大学は出たけれど、生活は相変わらず決まりに従って仕事をする。朝、弁当箱を持って家を出て、日中は事務室で夜の十時まで働き、それからわき目もふらずに胡同を抜けて家に帰った。その時、父はすでに他界し、母と三番目の姉との暮らしだった。三聯書店で、文潔若は

真面目で名を知られていた。仕事の素養が植字工の間違えた所を直すだけで満足させなかった。校正中、文潔若はわざわざ原本を探してきて、訳し漏れ、誤訳の所を一つ一つ指摘した。

仕事の能力が認められ、翌年、人民文学出版社が創設された時、文潔若は移らされ、編集助手になった。文潔若が翻訳家の道を歩むようになったのは、人民文学出版社社長だった楼適夷のお蔭である。文潔若には忘れられない一幕がある。ある晩、楼社長が横の扉を押して彼女の事務室に入ってきた。手には『白頭山』の日本語訳を持っていて、彼の訳について意見を求めた。これは朝鮮の詩人趙基天の代表作で、詩は七章に分かれ、テーマは抗日パルチザン闘争である。文潔若は鉛筆で訳のそばに訂正の意見を書き、すぐに楼社長に渡した。楼適夷はとても満足し、それから文潔若にとって最初の翻訳となる春川鉄男の『日本労働者』を翻訳するように言った。その本は1955年に出版された[8)]。

社長の励ましを受けてから、文潔若は疲れも知らず仕事に没頭し、結婚について考えたこともなかった。周囲にいた同じような年齢の男性に、誰一人彼女は興味を示さなかった。誰が想像しただろう。二年後、蕭乾の出現が彼女の静かな生活を打ち破った。蕭乾を始めて間近に見た時の印象について、文潔若は次のようにユーモアたっぷりに書いている。

> 1953年春末，我们正在两排办公楼之间的空地上做工间操时，校对科的小丫捅捅我的背，忍俊不禁地咬耳朵说："你看萧乾那个怪样儿。"我一回头，瞥见一个身穿黑色旧呢中山服的中年人正在认认真真地做着弯腰动作。但腹部凸出，双手指尖怎么努力地触不着地面，那副样子看上去着实滑稽。[9)]

1953年の春の終わり、人民文学出版社にやって来て間もない蕭乾が仕事の合間の体操の列に加わったのだ。蕭乾のお腹が出っ張っていて、どんな

に頑張っても指先が地面に着かない。文潔若の第一印象は実に滑稽な蕭乾の姿だった。

文潔若は高校の時、蕭乾の《梦之谷》を読んで、深く胸を打たれた。第二次世界大戦の間、蕭乾は《大公报》の従軍記者として、英軍に同行してドイツ軍の潜水艦が出没するイギリス海峡を数回渡り、アメリカ第七軍に同行してライン川に突き進んだ。ポツダム会議からニュルンベルクでのナチス戦犯の審理判決、さらには国連の成立大会まで、最初から終わりまで六年間戦った戦争を記録し、その前線と後方を書いた。戦争が終結し、蕭乾は収入が薄い香港の新聞社員になれたし、母校イギリスのケンブリッジ大学に招かれ教授にもなれたが、友人や親戚の制止を聞き入れず、家が恋しいハトのように、自分の生れた場所に急いで戻ったのだった。

蕭乾は出版社にやって来たばかりの時、映画の脚本を手直ししていて、めったに顔を出さなかった。蕭乾に直してもらう必要がある原稿は、彼の家に送った。文潔若は英文から翻訳したソ連の小説《百万富翁》を持って蕭乾を訪ね、教えを請うた。十日後、文潔若は彼が手直しした原稿を受け取った。一読して、大いに啓発されたような気持ちになった。文潔若が長い間うまく直せなかった文を、彼は融合して体系化しているだけでなく、翻訳の調子を振り捨て、創作したようになっていた。

蕭乾の才能は文潔若を感服させた。彼が出勤すると、文潔若は常に教えを請うた。蕭乾は死んだ訳、硬い訳に反対し、文潔若に原著の精神をしっかり掴み取るように指導した。蕭乾は学識が広く、彼の話はとてもユーモアがあり、一人の大作家、名記者として、文潔若のような駆け出しの編集助手に対しても、根気強く励ましを与えてくれ、それが彼女をとても感動させた。交際が増えるにつれて、二人にはたくさんの共通の趣味があることにも気づいた。共に外国文学を研究し、ロマン・ロランやディケンズが好き、共にモーツアルトのレクイエムを好んで聴いた。平穏な生活にさざ波が立った。文潔若は「蕭乾は仕事の上で、案内人であり、自分の才能を

認め理解してくれる人である。」と意識するようになった。[10)]

文潔若が蕭乾を伴侶に選んだ理由について、李輝は《蕭乾伝》の中で、次のように書いている。

> …文潔若は自分の運命を蕭乾としっかりつなぐことに決めた。しかし、周囲の議論や善意の忠告が彼女を一度ためらわせたことがあった。ある人は彼女にこう忠告した。蕭乾は三度離婚した人間である。感情面で信頼できない。文潔若ははじめて愛情を探し当てた。彼女は自分の感覚と気持ちに基づいて、最後は人々の予想外の選択をした。彼女は自分の判断を確信していた。彼女は蕭乾と触れ合う中で、彼の誠実さと率直だけを受けとった。蕭乾は彼女に自分の私生活について包み隠さなかった。自分はかつて一人の女性を棄て、二人の女性に棄てられた。蕭乾は知っていた。不安定な結婚生活は生命の一番大きな浪費であると。曲がりくねった道を歩んだ人間は、いつまでも平坦で広い大きな道を歩こうとすることをより望む。年齢が増すにつれて、青年の時の衝動や軽はずみな行動は減っていくだろう。文潔若は彼の率直さを少しも疑わなかった。実際、文潔若はもはや自分の感情のコントロールが利かなくなり、蕭乾との生活に入っていった。[11)]

夫が教えてくれたこと

文潔若が出版社で校正係をしていた時、普通の校正係なら原稿を見て、文字に櫛を入れ、誤字や文法の誤りを直すのみだが、彼女の真面目さと勤勉さがそれらの本業に満足せず、外国語の原文を取り出して、一字一句照合することに駆り立てた。訳文と彼女の考えが合わない時、無意識の内に蕭乾の扉を敲いた。彼女が直面した問題について、蕭乾は一つの基本的原則を出した。それは“黒白错”（明らかな間違い）でなければ、作者の訳を勝手に正してはならないということである。特にすでに評価されている文

壇の先輩に対しては。“黒白错”とは訳し方が間違っている所である。彼女は大いに賛同した。[12)]

蕭乾に教えを請うた本はジャック・ロンドンの『荒野の呼び声』、訳者は進んで文潔若の考えどおりに直そうとはしない。文潔若自身も《文学姻缘》の中で、その時の蕭乾の回答について、このように書いている。

> この文はもとの意味があいまいで、私が出した修正意見は筋が通っている、もし私自身が訳したのなら、そのように訳して良い。しかし、訳者がそのように訳したいのなら、彼は間違っていると言ってはならない。これは“黒白错”（明らかな間違い）ではなくて、直せるか直せないかに属する問題で、他人が訳している以上、やはり直さない方が良い。[13)]

蕭乾は文潔若に言った。自分の翻訳のやり方はゲリラ式である。決して一人の作家の作品を抱え込んで訳すのではない。そうは言っても蕭乾は陣地式の訳し方をより尊重した。つまり一人の作者の全集を集中的に訳すのである。例えばチエーホフを訳す汝龙やバルザックを訳す传雷。このように翻訳すれば、作者に対する理解がより深まり、より原作にぴったり付くことができる。

蕭乾は“死译或硬译”（生気のない訳或いは硬い訳）に反対した。文学作品を訳す場合、まず原作の精神をしっかりつかむことを考えた。もし原文が悲壮なら、訳文は却って感情を奮い立たせて同じような感情を出さない。あるいは原作がユーモアに富んでいるのなら、訳文は却って内容を無味乾燥にする、より忠実にしようとしても忠実とはならないのである[14)]。

蕭乾と文潔若は結婚後、創作や翻訳に没頭し、共に時間を過ごした。二人はいつも夜が明けないうちに起床し、夜更けまで休もうとしなかった。質素な服を着て、一番簡単な食事をとったが、生活は楽しみに満ち、充実

感を十分覚えていた。しかし、二人は三年の良い時を過ごしただけで、蕭乾は右派に間違って区分され、批判闘争に遭い、労働改造に行かされ、前後して二十二年の長きに渡って、人生の一番良い時間を無駄に失い、すっかり浪費した。文化大革命の間に、文潔若の母親は追い詰められて死に、蕭乾も自殺しようとするまで、とことん屈辱を受けた。文化大革命が終わると、二人には幸せな時間がやってきたが、残念ながら長く続かず、すでに晩年に入った蕭乾は病気がちで、文潔若は病院を家とする生活を始めざるを得なかった。夫に付き添い、面倒を見るために、最後の二年間はずっと病院の狭い折りたたみベッドで寝た[15]。

蕭乾の死後、2005年1月29日に挙行された《萧乾译作全集》出版座談会の席上で、版元の太白文艺出版社編集長代理である黄道京は、蕭乾の翻訳作品について全体的に三つの特徴、すなわち「適切である」、「生き生きとしている」そして「ユーモアがある」と指摘した。「蕭乾が他の人と一番異なる所はユーモリストである。彼は原文のユーモアに対して中国式の伝達ができ、よくよく味読するととても味わいがある。」[16] と、述べている。

周作人、銭稲孫から直接学んだこと

1950年代末から文化大革命の前夜まで七年間、仕事の関係で、文潔若は周作人と頻繁に連絡を取り合っていた。1952年8月から、人民文学出版社は周作人に原稿を依頼、周作人にギリシャと日本の古典文学作品の翻訳をしてもらっていた。前任から仕事を引き継いだ文潔若は毎回連絡に行く前に、必ず手紙を書いて、約束の時間通りに周宅に行った。いつ行っても彼の書斎は窓が明るく机は整頓されていた。

中国が建国されてから、周作人が人民文学出版社のために訳したのは八世紀初めの『古事記』、十一世紀の『枕草子』、十三世紀の『平家物語』、十四世紀の『日本狂言選』、十八世紀の『浮世風呂』と『浮世床』、そして二十世紀の『石川啄木詩歌集』、時間軸にして一千年あまりに渡る。

文潔若は周作人の翻訳を次のように評価している。

> どの作品も、彼が訳すと思いのままに筆を執るが、原作の形をなくしていない。得がたく尊いのは、どの時代の作品であれ、彼はわが国の豊富な語彙の中から適当な字句を探し出して表現する。このことは彼が国内外の文学に対する造詣が深いことを十分証明している。私は編集の仕事に従事して四十年近くになるが、下手くそな原稿に出くわしたら、（中略）読者に対する責任から、無理をして一字一句校訂し、仕事は編集の範囲をはるかに超えてしまうのである。周作人の原稿も私は原文を運んできて照合するが、それは学習のためで、これまで誤りを見つけたことがないばかりか、訳し方が素晴らしい所に出会うと、思わず机をたたいて賞賛するのである。[17)]

周作人と同様に編集業務で七年間付き合った人物がもう一人、銭稲孫とは文潔若にとって忘れられない師弟関係の親交があった。1958 年 11 月より、文潔若は重い病気にかかっていたベテラン編集最高責任者・張夢麟から日本文学の仕事を引き継いだ。当時の状況は、日本文学の翻訳者は多いけれど、古典文学の名著の任に堪えうる翻訳者は、なかなか見つからなかった。例えば近松門左衛門の浄瑠璃を翻訳する適任者はずっと見つからなかった。人に頼んで訳してもらって、張夢麟先生に見てもらったが、何度も首を横に振った。文潔若は銭稲孫先生に一段訳してもらい、張先生にご覧頂くと、先生は机をたたいて称賛した。そこでやむなく銭先生にひとまず『源氏物語』の翻訳を後回しにしてもらい、近松の作品と井原西鶴を改訳してもらうことにした。

勤務先の楼適夷副社長の発案で、1962 年から 65 年まで、文潔若は銭稲孫のもとで、日本の古典文学を学んだ。先生の暮らし向きは貧しく、保母は何かにつけて辞めていった。先生より四歳年上の夫人は、腸の癌を患い、

いつもこの八十近い老学者が世話をしていた。先生の負担を増やさないために、私たちは学習と仕事を結びつけることにした。先生が訳すところを私が学ぶ。このようにすることで、実際先生の原稿整理を手伝うことができた。近松門左衛門の『曽根崎心中』『心中天の網島』『出世景清』『平家女護島～俊寛』の翻訳は文潔若が整理を手伝って出来たものである。1963年、文潔若は銭稲孫先生に有吉佐和子の『人形浄瑠璃』を訳してもらう約束をした。そのころ先生は浄瑠璃を翻訳していて、日本の女流作家の中編小説は、当代の人形浄瑠璃師の日常を題材にしている。先生の他にふさわしい訳者は見つからなかった。先生はたった二ヶ月で全文を訳した。

1963年、文潔若は豊子愷が訳した『源氏物語』第一巻を一通り整理した。その当時、銭稲孫はすでに白内障を病んで、字を読むのに苦労した。そこで彼女は『源氏物語』の一区切りを読んで、それから豊子愷の訳を読んだ。銭稲孫は完全に聴覚にたよって自分の意見を言い、こうして数十項目の訂正意見が整理された。文潔若は一式二部複写したが、それは銭稲孫の口述にすぎず、目を通していない。文潔若は自信が持てず、周作人に頼んで鑑定してもらうことにした。周作人は一旦断ったものの、親友である銭稲孫との友情を考えて、この任務を引き受けてくれ、さらに真剣に鑑定し、私たちが抜け落としたいくつかの問題を見つけてくれた。残念ながら、文化大革命の期間に、元の墨跡は紛失してしまった。幸いにも訂正意見を複写したもう一部の訂正に関する記述に清書していて、1980年代に原稿を組版に回す段階で、使えた。銭稲孫、周作人の仕事は骨折り損とはならなかった[18)]。

文潔若は若いときに出会った大家を思い出して感嘆する。「昔のように学問の基礎がしっかりしていて、筆が立ち、しかも訳した作品の理解が深い大家レベルのベテランの翻訳者を、今では見つけることが本当に困難だ。」文潔若の人生にも沢山の先生がいたが、恩師と呼べるような先生は殆どいなかった。ただ銭稲孫先生は確かに彼女にとって恩師であった。銭稲孫を

評価する理由について、文潔若は「原作に忠実な基礎の上に文が美しいからだ」[19] と述べている。

文潔若の翻訳論（結び）

文潔若が、中国で日本文学を一番多く翻訳している翻訳家であるという言い方は広く認められているが、そのことに対して彼女は「私の作風は主に原作に忠実で、忠実な基礎の上に方法を考えて飾り付けを進める。例えば原文に数回“忽然”（突然）が数回現れたら、それを多様化させて“抽冷子”“猛可里”などに変える。これはすべて私が調べ出したものだ。私は良い文章をはさみで切って保存し、できるだけ語彙量を拡充する、あれこれ考えて自分の文章力を高める。読者を喜ばせる、読むと翻訳の調子になっていない。」と、述べている。

中国における最初の社会進化論の概念である『天演論』（Evolution & ethics and other essays, Thomas Henry Huxley）を翻訳し、世に広めた厳復（1854-1921）は、翻訳論において「信・達・雅」を提唱し、この精神は中国でこれまで重要視されてきた。《在线汉语词典》（xh.5156edu.com）によると翻訳作品の内容が原文に忠実なことを信、文章が良く通って滑らかなのを達、筆が立つことを雅という。文潔若は、翻訳は‘信’の基礎の上にできるだけ‘達・雅’まで到達しなければならないが、‘信’が何より大事だと考えていた。この考えは恩師、銭稲孫の家で学んだ四年間に培われたことを証明している。そして、この考えは夫・蕭乾との畢生の共訳『ユリシーズ』にも活かされた。二人の翻訳作業は文潔若が‘信’、蕭乾が‘達・雅’を分業するというスタイルで進行した。蕭乾は「妻はねじ釘一本も失くさない」と称えた[19]。

文潔若は2012年、中国翻訳家協会から翻訳家個人を表彰する最高の栄誉ある称号、“中国翻译文化终身成就奖”を受賞した。2019年の時点で僅か25名の翻訳家しか受賞していない。「翻訳家はどのように翻訳のレベルを

高めるべきか」という質問に対して、彼女は次のように答えている。

> ある国家の文字を別の国家の文字に翻訳する場合、原作の優れた趣を損なわないように努める。両国の文字、文法構造の違いによって、訳文に無理やりこじつけたぎごちない痕跡を残さない。これは決して簡単なことではない。わたしの心にある理想的な翻訳者は二つの言語を思いのままに駆使するだけでなく、両国の文学史、特に古典文学に理解がなければならない。
>
> 翻訳の水準を上げたいなら、翻訳者はたゆまず読書し続けなければならない。読書は翻訳レベルを上げるための唯一の方法である。まず、ある作品を翻訳する前に、言語スタイルや文体が似ている作品を読んでみる。私（文潔若）は幸田露伴の『五重塔』を翻訳する前に、“三言”“二拍”などの明清の小説を一通り読んだ。（中略）次にある作品をちゃんと翻訳したいなら、作者の略歴、考え方及び文学のルーツについて、深く系統的な研究をし、その人を知らなければならない。最後に翻訳者は作品を翻訳した後、あとがきを書いて、作家や作品についての認識を整理し、翻訳の感想を総括すべきである。[20)]

文潔若は「翻訳について自分なりの理論はあるのか」と問われた際、「何ら深遠な理論をまとめていない」と述べたうえで、「翻訳は科学技術が代わることができない創造的な労働である。」と結論づけている。

> 翻訳は創造的な労働である。私たちが農作業をするように直接やれば良いと言っているのではない。翻訳は個人の沢山の見解や理解が溶け込み、自分が翻訳する作品について、それを理解し、融合して体系化し、そこで感覚が持てて、順調に完成させることができる。翻訳した作品に、訳者の理解、判断に誤りがあれば、翻訳したものも正確で

はないはずだ。だから翻訳はある種の創造的な労働である。[21)]

文潔若はずっと一番伝統的な方法である手書きで翻訳の仕事に従事している。とても疲れるけれど、気持ちはとても落ち着く。彼女は全ての興味を自分が目をかけていること、翻訳と執筆に向けている。それは彼女にとって楽しいことであり、長生きの秘訣でもある。夫・蕭乾に先立たれて二十一年、一人暮らしの彼女は寂しさを別に感じない。昨年（2020）年八月に自宅の廊下でつまずいて転び右手を骨折したが、周囲の人が腕利きの家政婦を探してくれたお蔭で、一ヶ月で奇跡的に回復した[22)]。

文潔若は、以前翻訳した川端康成の『東京の人』[23)] の校正に余念がない。彼女の部屋には息子・蕭桐が素描用の木炭で描いた川端康成の肖像画がある。一人暮らしをしていた時、家の中が散らかっていても、箪笥の引き出しがちゃんと閉まっていなくても、食べ残しの茶碗がまだ残っていても、暮らしの細かなことは全然気にならない。文潔若は今日も文書の前に座り、近く出版される亡き夫の全集を校勘し、日本語の作品を翻訳する。

注

1）《文洁若；我还能工作到 100 岁》，中国作家网 2015 年 7 月 21 日 来源；《北京日报》记者，孙钺摄

2） 吴江涛《文学翻译的使命与跨域功能　访翻译家文洁若》，中国作家网 2015 年 7 月 21 日 来源；《中国文艺评论》2020 年第 2 期

3）《文学翻译界面临“青黄不接”》，《中国青年报》2005 年 2 月 6 日

4） 文洁若《文学姻缘》，《砚田内外》萧乾、文洁若　商务印书馆　2018. p255.

5） 翻译家文洁若：今天我过九十岁生日，所以要休息半天，中国作家网 2019 年 8 月 9 日；来源《文艺报》云韬

6） 文洁若《写到拿不动笔的那一天》，《砚田内外》萧乾、文洁若　商务印书馆　2018. p265.

7） 同上 p266.

8） →注 1）参照

9）　文洁若《我与萧乾》，广西教育出版社　1992. 上部，一，文字之交
10）　文洁若的翻译岁月，《各界导报》2019. 8. 1.
11）　李辉《萧乾传》，江苏文艺出版社　1993. p291.
12）　→注 5）参照
13）《砚田内外》萧乾、文洁若　商务印书馆　2018. p257.
14）　同上 p259～p260.
15）《文洁若生机至老更无限》，中国作家网 2007 年 3 月 19 日
16）　文学翻译界面临“青黄不接”，《中国青年报》2005 年 2 月 6 日
17）　文洁若《晚年的周作人》，《读书》1990 年 6 期，三联书店
18）　文洁若《我所知道的钱稻孙》，《读书》1991 年 1 期，三联书店
19）　→注 1）参照
20）　文洁若：译路慢慢谨为终身摆渡人，中国作家网 2019 年 7 月 19 日；来源《中国社会科学报》潘佳宁
21）　→注 2）参照
22）《文洁若：我还要工作二十年》，中国作家网 2020 年 12 月 28 日；来源《文汇报》赵蘅
23）　戦争未亡人の女性を主人公にした川端康成の新聞小説。1956 年に映画化（制作会社日活、監督西河克己）、1966 年にはテレビドラマ化された。主演は共に月岡夢路。

文潔若　著訳書目（初稿）

Ⅰ　翻訳

1. 日本文学

日本劳动者（春川鉄男）　梅韬，文洁若訳　作家出版社　1955.
活下去（『活きる』山田うた子）　作家出版社　1956.
日本的黑雾（『日本の黒い霧』松本清張）　人民文学出版社　1965.
木偶净瑠璃（『人形浄瑠璃』有吉佐和子）　钱稻孙，文洁若訳　作家出版社　1965.
有吉佐和子小说选　人民文学出版社　1977.
夜声（『夜の声』井上靖）　上海译文出版社　1980.
树影（『樹影』佐多稲子）　湖南人民出版社　1980.
芥川龍之介小说选　人民文学出版社　1981.
日本短篇小说选　文潔若编选　人民文学出版社　1981.
日本当代小说选・上下冊　文洁若编选　外国文学出版社　1981.
防雪林（小林多喜二、山田うた子）　山西人民出版社　1982.

曽野綾子小说选　外国文学出版社　1982.
水上勉选集　外国文学出版社　1982.
小林多喜二小说选・上下冊　人民文学出版社　1983.
平家物語　人民文学出版社　1984.
海魂（井上靖）　文洁若，文学朴訳　中国文联出版公司　1985.
祈祷（有吉佐和子ほか）　文洁若ほか訳　黑龙江人民出版社　1986.← 壁音（『壁の声』三浦綾子）　文洁若訳
他的妹妹（武者小路実篤）　人民文学出版社　1987.
五重塔 中短篇小说选（幸田露伴他）　漓江出版社　1987.
高野圣僧（『高野聖』泉鏡花）　人民文学出版社　1990.
光江的初恋（中本たか子『不死鳥』最終章）　国际文化出版公司　1991.
汤岛之恋（泉鏡花）　鹭江出版社　1992.（人民文学出版社　2019 再版）
彩虹梦（森村誠一）　百花文艺出版社　1995.
十胜山之恋（『泥流地帯』三浦綾子）　百花文艺出版社　1996.
世界中篇小说经典 日本卷　春风文艺出版社（瀋陽）　1996.
川端康成十卷集 第六卷，第七卷 东京人　河北教育出版社　2000.
最后的时刻（曽野綾子他）　城邦文化事业有限公司（台北）　2001.
理解・友谊・和平　池田大作诗选　作家出版社　2002.
魂断阿寒（『阿寒に果つ』渡辺淳一）　文化艺术出版社（北京）　2004. 1.
罗生门（『羅生門』芥川龍之介）　上海三联书店　2010. 4.
万葉集精选　钱稻孙訳、文潔若編　上海书店出版社　2012.
深层海流（松本清張）　人民文学出版社　2012.
杂忆录（夏目漱石）　红旗出版社　2013.
天人五衰（三島由紀夫）　重庆出版社　2014.
春雪（『春の雪』三島由紀夫）　重庆出版社　2014.
傻子的一生（『ある阿呆の一生』芥川龍之介）　中信出版社　2018.
五重塔（幸田露伴）　现代出版社（北京）　2019. 1.
黑白（谷崎潤一郎）　现代出版社（北京）　2019. 1.
小丑之花（太宰治）　重庆出版社　2021. 5.
人間失格（太宰治）　重庆出版社　2021. 5.

2. 英米文学
活的中国　斯诺（Snow .E）　湖南人民出版社（長沙）　1983.
里柯克随笔集　里柯克（Leacock）　海天出版社（深圳）　1993.

尤利西斯　乔伊斯（James Joyce）　萧乾と共訳　译林出版社　1995. 6.
美国新科技探案小说 X 档案　萧乾、文洁若訳　少年儿童出版社　1998.
夜幕降临　尼尔森・德米勒　萧乾、文洁若訳　少年儿童出版社　1998.
哈姆莱特　莎士比亚（Shakespeare）萧、文訳注　湖南文艺出版社　1999.
奥赛罗　莎士比亚　萧、文訳注　湖南文艺出版社　1999.
罗米欧与朱丽叶　莎士比亚　文洁若訳注　湖南文艺出版社　1999.
威尼斯商人　莎士比亚　人民文学出版社　2001.
园会　曼斯菲尔德（Mansfield）　人民文学出版社　2006.
莫瑞斯　福斯特（Forster）　上海译文出版社　2009.　2016. 7. 再版
一个已婚男人的自述　曼斯菲尔德　上海三联书店　2010.
在理发师的剃刀下（Selected essays）　里柯克　上海文艺出版社　2016.
蜜月（Honeymoon）　曼斯菲尔德　人民文学出版社　2017.
E．M．福斯特文集 2020 版　上海译文出版社

3．ギリシャ、ロシア、フランス文学
沙漠　纳吉宾（ロシア）　作家出版社　1956.
荷马（ホメロス）史诗故事　文洁若编译　四川少年儿童出版社　1986.
《奥德赛》（オデュッセイア）故事　文洁若编著　海南出版社　1999.
《伊利亚特》（イリアス）故事　文洁若编著　海南出版社　1999.
托尔斯泰（トルストイ）中短篇小说选（ロシア）　太白文艺出版社（西安）　2005.
木马屠城　荷马著，文洁若编写　商务印书馆香港有限公司　2006.
英雄奥德修　荷马著，文洁若编写　商务印书馆香港有限公司　2006.
圣经故事（The bible stories）　玛丽・巴切勒　华夏出版社　2011.
悲惨世界（レ・ミゼラブル）　雨果（フランス），文洁若改写　中国致公出版社　2013.
多少地才够　托尔斯泰　游目族文化事业有限公司（台北）　2014.

Ⅱ　著作
萧乾与文洁若　天下文化出版公司　1990.
我与萧乾　文洁若　广西教育出版社　1992.
梦之谷奇遇　文洁若　中国友谊出版公司　1992.
旅人的绿州　萧乾、文洁若　江苏文艺出版社　1995.
文学姻缘　文洁若　湖南出版社　1997.
文洁若散文　华夏出版社　1999.
重阳成都行　吉林摄影出版社　1999.

微笑者离去——忆萧乾　吴小如、文洁若编　辽海出版社（瀋陽）　1999.
文化人影记丛书——萧乾　河北教育出版社　2001.
生机无限（回忆录）　北京十月文艺出版社　2003.
萧乾文萃　文洁若　东方出版社（北京）　2004.
俩老头儿：巴金与萧乾　文洁若　中国工人出版社　2005. 10.
一对老人两个车间（萧乾、文洁若散文）　太白文艺出版社　2005.
书评·书缘·书话　萧乾、文洁若　浙江大学出版社　2010.
冰心与萧乾　萧乾、文洁若　上海三联书店　2010.
一生的情缘　文洁若　上海远东出版社　2010.
萧乾家书　文洁若编　东方出版社（北京）　2010.
风雨忆故人　文洁若　上海三联书店　2011.
《源氏物語》在中国　文洁若　北京大学出版社　2014.
澜沧江畔 对菩提树　新世界出版社　2014.
岁月流金（随笔）　文洁若　海天出版社（深圳）　2016. 9.
译海寻踪（散文集）　文洁若　江苏凤凰文艺出版社（南京）　2016.
不曾停歇的旅程　文洁若　北方文艺出版社　2017.
砚田内外　萧乾、文洁若　商务印书馆　2018.